



Title	女性アスリート・人見絹枝の自己像の揺らぎ：表象をめぐるせめぎ合いを中心に
Author(s)	草替, 春那
Citation	日本学報. 2025, 43-44, p. 103-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101374">https://hdl.handle.net/11094/101374</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2023年度 卒業論文・要旨】

# 女性アスリート・人見絹枝の自己像の揺らぎ

—表象をめぐるせめぎ合いを中心に—

草替 春那

## 要旨

本論文は、1928年アムステルダム五輪に日本人女性として初めて出場した陸上選手、人見絹枝に焦点を当て、女性スポーツの黎明期に女性アスリートが直面したナショナリズムとジェンダーをめぐる問題や、抱え込んだ葛藤を浮かび上がらせる目的とする。中心となる問いとして、人見はどのようにして自らを「代表者」として位置づけ、「個人」を見出すに至ったのかというものを設定した。この問いを、自己表象と他者による表象がせめぎ合う中で人見が提示した自己像に着目して紐解いた。

1章では、近代スポーツが日本で発展する過程を整理し、男性中心的なスポーツ空間に女性が参入する際に、性のダブルスタンダードが用いられたことを確認した。2章では、先行研究の整理と雑誌記事の分析を通して、1920年代の女性スポーツをめぐってジェンダー規範や制限が巧妙に設けられたことを指摘した。3章では、人見をめぐる他者による表象について分析した。人見は国家の代表者としては賞賛されたが、ジェンダー規範を逸脱する女性として肯定されることにはほとんどなかった。4章では、自伝から人見が「代表者意識」を形成し、「個人」を見出すに至る過程を確認した。人見は「個人」と「国家」の狭間で絶えず揺れ動いていたが、日本人に認められないという経験を経て「個人」に帰着した。5章では、見出された「個人」がどのようなものだったのかを考えるために、幅広い文脈からの人見の語りを分析した。その結果、

人見は「個人」—「国家」間だけでなく、ジェンダー規範との交渉や衝突を繰り返す中でも揺れ動いていたことが分かった。こういった多方面での揺らぎは、人見が抱えた葛藤の激しさと複雑さを物語っている。人見の葛藤は世間の人々の多くには理解されなかつたが、女性アスリートとの交流にまつわる語りに着目すると、人見が見出した「個人」は国内外の女性アスリートとの連帯の中にある「個人」であったと考えられる。

## 目次

はじめに

- 1章 日本におけるスポーツと体育の発展
- 2章 1920年代の女性スポーツに注がれたまなざし
- 3章 他者による表象の中の人見像
- 4章 「日本代表」としての人見の自己像
- 5章 自己表象に見る揺らぐ自己像

おわりに